

SDG s 17 の目標と私の関心

社会福祉学科3年 郷古 大雅

○SDG s に関心を持ったきっかけ

教育学部科目「家庭科の指導法」にて、現代の消費生活を考えるというテーマの下、 Bangladesh の縫製労働を取材したドキュメンタリー教材を視聴した。発展途上国の人々があまりに低い賃金、劣悪な環境での労働を余儀なくされ、我々が普段購入している安い衣類が作られているという内容であった。縫製労働者の状況を SDG s の目標と照らし合わせてみると、その多くにギャップが存在していることが分かる。賃金はその日生活していけるかどうかのごくわずかの額。縫製工場内は、高い温度と湿度、有害な物質が空气中に充満し、換気も十分でなく、漏電の危険性なども高い。働いている多くの女性は、社会的な地位の低さゆえに十分な教育を受けられず、仕事を選ぶことが難しい状況にある。これだけを見ても、現状は多くの目標からほど遠くはなれているのが分かる。

私は以前まで、SDG s の概要を知らないばかりか、発展途上国に対して「貧しいために仕事や食料がないところ」という程度の印象しか持っていなかった。実際には、貧困、環境、人権などの SDG s の 17 目標に関する諸問題が、数多く重なった結果として現在の厳しい状況がある。

SDG s の目標として掲げられた問題を、対岸の火事として捉えることはできない。各問題を、国ごとに区切って考えるのではなく持続可能な世界をつくるという認識を持たなければならない。日本でも、多くの企業が SDG s に注目し、行動を開始している。これから社会に出て働く私たちにとって、SDG s の理念や目標は、皆で共通認識しておくべき事項となるだろう。

○関心分野：ディーセントワーク

ILO (国際労働機関) によって、ディーセントワークという考え方が提起された。働きがいのある人間らしい仕事を指しており、具体的には「前提として仕事があり、権利や自由と平等を保障し、尊厳ある働き方」のことであると考えられている。SDG s では、就労に関して「働きがいも経済成長も」という目標を掲げている

ある障害者の男性の話をお聞かせいただく機会があった。男性は、就労継続支援事業所へと通っていたが、ある縁から自分の興味のある分野に飛び込んで学び始め、現在は企業で出社勤務と在宅勤務を織り交ぜながら一般就労を果たしている。この男性のエピソードは、まさにターゲット 8.5 (若者や障害者を含む全ての男性及び女性の、完全かつ生産的な雇用及び働きがいのある人間らしい仕事、並びに同一労働同一賃金を達成) の一部を達成した事例であるといえる。

彼は様々な差別を経験したことを語ってくれた。彼を受験や就職活動において差別してきた人は、「障害のある何もできない人」と捉えていたのだろう。しかし本当は、発揮できる力を持っていた人であるにも関わらず、周囲の偏見がそれを抑え込んでいた。かくいう私も、今だからこそそのようなことが言える。男性が結果を出す前に出会っていたならば、「支援の必要な障害のある人」としか捉えられなかったように思う。

近年では、「テレワーク」という働き方も注目されている。まだ一般に浸透しているとは

言えず、国土交通省の平成 30 年度調査資料によると、日本での雇用就業者のうち 16.6%がテレワーク形態で就業をしているとの結果である。前年度と比べ約 2%上昇している。このような働き方が社会に浸透したとはまだ言えず、「テレワークという働き方を知っている」と回答したのは調査対象者の約 3 割である。

私は、ターゲット達成のためにもテレワークの更なる普及が必要であると考え。能力（潜在的なものも含む）を持っている人であっても、自身の障害のために出勤をするということが難しい場合がある。力はあるのに、身体や精神の理由から出勤ができない、もしくは福祉的就労に留まり続けてしまうということは、本人にとっても社会にとっても損失であると考え。在宅で働くことが当たり前のように浸透してくれば、関心のある分野で自分の力を発揮できる可能性、選択肢が増えることとなる。障害者に限ったことではない。健常者であっても、テレワークは通勤の負担を軽減もしくは無くし、また人間関係のトラブルもある程度は減少させることができるように思う。

近年では子どもが幼児期であっても保育園に預け、出勤していく母親も少なくない。私が託児のボランティアに参加していた時、ある幼児が初めての寝返りを打った。その後迎えに来た母親がそのことを知ると、「見たかった」ということを話していた。子どもが幼いうちから働くことを否定するつもりはない。だが、我が子の成長の段階を自分の目で見たいと考える母親は当然多いのではないだろうか。母親が子を預け出勤することを否定はしないし、四六時中つきっきりでいたほうが良いとも思わない。ただ、どうしても出社するために子どもを早くから預けなければならないという働き方には疑問を感じる。障害のあるなしに関係なく、誰もが自分の生活スタイルに合った働き方を選択できる社会を目指すことが当然ながら望ましい。

あくまで選択肢として想像しているだけに過ぎないが、私は就労支援の業務に興味を持っている。もしもそのような仕事を選んだ場合には、個別的な状況や個性に合った働き方を、人や社会に対し提案したり、自分で実践できる人間になりたい。

○個別に取り組んでいる活動との関わり：聴覚障害学生への支援活動と目標 5

大学のサークル活動として、聴覚障害のある学生の受講支援に携わっている。この活動は、目標 5「質の高い教育をみんなに」と関係している。中でもすべての人々の高等教育への平等なアクセスを目指したターゲット 4.3 との関わりが深いと考えられる。このサークルでは「障がいのある学生もない学生も同じように学生生活を送れるように」という目的を掲げ活動しているが、今のところは「受講支援」で一杯であるというのが現状である。サポートの利用学生の履修科目については、サークルメンバーが交代でシフトに入り、支援を行うことができる。しかし、もし利用学生が「6 限にある自由参加のセミナーを聴きに行きたい」と思っていたとしたらどうだろうか。現状では支援に入ることは難しい。支援学生にもそれぞれ他の活動もあり、そもそも人的資源も豊富にあるわけではない。よしんば支援に入ることができたとしても、利用学生は申し訳なさを感じたり、遠慮をしてしまうのではないだろうか。だが、聴覚障害を持っていない学生ならば、行きたいと思えばいくらでも行くこ

とができる。他人を気にすることもなく、友達同士でもいいし、一人で気楽に参加するのもいい。ここに障害を持つ学生とそうでない学生の大きな溝があるのではないかと思う。我々がどんなに受講支援を行ったとしても、この溝を埋めない限り、目標達成に近づくことはできないのではないだろうか。今は受講を支援しているのみに留まっているが、いずれは「学内のどこへ行っても当たり前前に支援が受けられ、受ける側も行う側もそれを支援とは思わない」という学校空間を創っていく必要があると考える。

また、現在ではあくまで音声で文字にするということまでしかできておらず、利用学生の「参加」を保障することが十分とはいえない状況にある。例えば話し合いの場面では、サポーターが要約筆記をしている間にも会話は進んでいく。そうすると、利用学生と周りとは話の認識にずれが生じてしまいやすい。平等な活動参加を保障するためにも、ICT 機器なども活用しながら、質の高い支援を目指していくことが必要となる。

もう一つ、今年から新しく始めたサークル活動がある。来校してくださった企業・事業所の方々に対し取材を行うという活動に参加している。動き出してからの日日は浅いが、SDGs に具体的に取り組んでいる企業の方々とお話させていただけたこともあった。これから先、このサークルが発展していき、関係する学生が更に多くの企業・事業所と関わる機会を得たのならば、東北福祉大学の学生に SDGs の認識が浸透していくことであろう。

○SDGs とどのように関わるか

ファストファッションが及ぼす悪影響を知ったとき、私が真っ先に思い浮かべたのは「不買」であった。1997 年、児童労働などの問題が発覚した有名スポーツブランドに対しての批判運動がおこり、経済的な打撃を与える結果となった事例がある。現代の情報社会であれば、ネットを通じて情報を得、人々が結束するということが比較的容易となっている。しかし、不買運動で問題は解決しない。企業の売り上げが落ちれば、下請けである縫製業に従事している人々の賃金は減り、解雇され、食事にありつけなくなってしまう恐れがある。人権侵害をしている企業を批判することは必要だが、そのことにより何ら非の無い末端の従業員が更なる被害を被る可能性を考えなくてはならない。一時の感情や、単純な考えでの行動は逆効果を招いてしまう恐れがある。ゴール到達のために我々ができることは、ひとりひとりが各目標に関心を持ち、目標に関する話題に敏感になっていく必要がある。

私達消費者が始められる活動として、エシカル消費というものが注目されている。エシカル消費とは、簡潔に言えば「人権、環境、地域のことを考慮してモノを購入、消費する」という考え方である。分かりやすい例でいうと、マイバッグ持参や、地産地消、フェアトレード商品を購入するなどといった行動が該当する。前述したファストファッションの話題に絡めれば、環境や人体に配慮したオーガニック素材を使用した衣類を購入するというのもエシカル消費の一例である。モノだけでなく企業を見る視点も重要となる。単なる不買運動は根本的な解決にはならないと前述したが、人権や環境を顧みない企業には監視の目を光らせ、逆に配慮を促進させている企業を応援することが効果的であると考え。不買運動を行い打撃を与えるのではなく、「人権や環境に配慮した商品の方が売れる」社会をつくり

だしていけば、自ずとそういったことを無視しない企業が増えていくのではないだろうか。同じく前述したテレワークに関しても、出勤形態で働く人が減少すれば、朝の時間帯に電車やバスを数分間隔で走らせる必要はなくなり、それだけの CO2 を削減することが可能となるのではないだろうか。

以上、SDG s の 17 の目標について、自分の興味関心のある分野や、関連する現在行っている活動について述べた。SDG s について調べてみると、発展途上国においては複数の問題が重なり抜け出しがたい悪循環に陥っていることや、悪質な企業を単に叩けば良いという問題ではないことなどを知った。問題はどれも単純ではない。環境配慮の活動として最も身近であると考えられる「マイバッグ活動」だが、バッグを製造するコストを考えると、一概にレジ袋を利用するより環境に優しいとは限らないとのことである。また、マイバッグをおしゃれ品として捉え、次々と買い替えていくという、ファストファッション業界と似たような状況も起こっているようだ。我々は物事の表面だけを見るのではなく、何が地球のためになるか、自分や社会の行動は、持続可能な地球へと繋がるかどうかを考えた上で、社会生活を送っていく必要があると考える。

【参考文献・資料】

平成 28 年版高齢社会白書

https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/pdf/1s2s_3_2.pdf

2019 年 12 月 13 日アクセス

長田華子『990 円のジーンズがつくられるのはなぜ？—ファストファッションの工場で行われていること』合同出版 2016 年 1 月発行

村上芽・渡辺珠子『SDG s 入門』日本経済新聞社 2019 年 6 月発行

国谷裕子『国谷裕子と考える SDG s がわかる本』文溪堂 2019 年 1 月発行

BCN+R『テレワークを活用して働く人の割合が年々上昇中、国土交通省調べ』

https://www.bcnretail.com/market/detail/20190408_113927.html

2019 年 12 月 19 日アクセス

大和ハウスグループ『エシカルとは？』

https://www.daiwahouse.com/sustainable/sustainable_journey/topics/ethical/

2019 年 12 月 20 日アクセス

WIRED『エコバッグやマイカップは本当に環境に優しいのか？ 「エコ」な行動に隠された 6 つの真実』

<https://wired.jp/2019/01/02/climate-change-myth-busting/>

2019 年 12 月 20 日アクセス